『比較民俗研究』11. 1995／3

白地の東巴文化
―麗江納西族予備調査の一光景―

佐野　賢治※

一. 納西族民俗文化概観

1993年の七月，中国雲南省の納西族の村を予備調査のために訪ねた。納西族は人口二七万余りのチベット・ビルマ系の，ヤク飼養を主とした牧畜民性と，米を作る農耕民性を合せ持つ，揚子江の最上流部に居住する少数民族である。その中心，麗江は富士山にも例えられる山容をもつ玉龍雪山（5596M）の麓に広がる文字通りの美しい古城の町である。八百万の神々を信じる日本の宗教状況に以て，納西族の人々はアニミズム，シャーマニズム，チベットの土着宗教であるボン教を核にしながら道教，小乗，大乗，チベットの各種の仏教を取り込み融合させた，日本の修験道に似た東巴教を信仰している。その経典は東巴文字という独特な象形文字で書かれ，現在それを読み書きできる東巴は数少なくなっている。

麗江から300km ほど離れたその東巴教の聖地，白地（白水台）で，東巴の和志本さんから話を聞き終わり，席を立とうとすると，案内役の文化站の和尚礼さんが，先程から囲炉裏端で快い寝息を立てている息子さんを無理やり揺すって起こしている。そのまま寝かしておくか，抱き上げてやれば良いのにと思ってそう言うと，子供の魂は寝ている間は体外に出ているので，その間に移動させると戻る場所がなくなってしまい大変なことになるという。万事がこの調子で，普通，人の魂は昼間は外に出ていて，夜，爪の間に帰ってくるので，決して夜爪を切ってはならないし，囲炉裏端でも，爪を切ってはならないという。病気は魂が彷徨い出て帰らない状態で，その判断は東巴に仰ぐ。通常，魂を呼び返すのは一家の主婦の仕事で，茶碗に米と卵一つ，そこに冷水を満たし，夕方，魂の声が聞こえる方角に向かって呼び掛け，戻らせる。魂がスウー（龍）に縛られた場合は主婦の手には負えず東巴に頼む。ひどい病気は鬼のせいである。鬼は戦死，自殺，産死など不自然に死んだ（タツ），汚いところで死んだ（チョツ）人がなる。家の前に夜，篝火をたき，灰を撒いておくと鬼の活動の跡である虎の足跡が付く。東巴は家の中で，煮えたぎった油に酒を注ぎ，そこに手を差し入れて鬼を招き，鋤を火で赤く焼いたものを口にくわえたりする法で鬼を払う。以前には刀梯を昇る法もやった。東巴の始祖が天界に行って嫁を貰ってきたからだという。夢は魂が彷徨っている間に見ていることであり，死とは魂が肉体から完全に離れた状態だと言う。白地の人々にとって魂や鬼は日常的に実在するのである。

白地の人々の平均年収は300元（当時日本円約6000円），行くときには野菜が不足しているというので，迪慶チベット族自治州の中心地，中甸の市で野菜を買い求めた。チベット族は基本的に野菜は作らない。遙か南からトラックで野菜を運び，売っているのは商売上手な白族である。白

※筑波大学歴史・人類学系助教授

地まで持参した野菜は最後まで登場せず，肉に化けてしまった。納西族の人は来客があるととくに丁寧にバター茶を入れてくれる。チベット族とは違い，ヤクのバター（マレイ），茶，塩の他に胡桃，落花生，芝麻，亞麻，鶏卵をいれる。茶受けにはトゥーというヤクの乳干の一種がよく出された。

この様な暮らしの中で，所員二人，東巴の和志本さんの三人で東巴経の料紙から自ら梳き，文革中に散逸した東巴経を思い出しながら書き記し，東巴文化の保存・育成に勤めている。東巴経典には先祖が日本に渡ったとの記載があるそうで，何人かの東巴からその子孫は今どうしているのかと尋ねられ面食らった場面もあった。白水台は広いテラスを持つ白い棚状の地であるが，その源には龍神が祭られている。農暦の２月８日が祭日で，この日には盛大な歌垣も行われる。白地から帰る日そこで，東巴の和志本さんが道中の安全を祈願してくれた。鶏を食べたときにかならず，東巴か長老が行う鶏の頭の骨を使った占いはその時，良い卦ではなかった。運転手さんの顔がさっと青くなるのが分かった。山を降りるときには必ず，良い木とされる三種の木の枝を手折って身につけるが，その枝を固く握り，車のバックミラーに結び付けていた。どんなになだめても中甸に帰るまで不安顔はそのままであった。

さて，東巴の行う儀礼は祭天（先祖祭り），祭風（殉情した人の霊をまつる），祭龍（龍神祭り），葬式，占いなどである。サニと呼ばれる憑霊する宗教者も他にいるが，儀礼から見ると，東巴の中にも性格の違いがあり，また，地域性もあるので一概には言えないが東巴は神主，僧侶，祈禱者の性格を合せ持つシャーマン・プリーストともいえる。また，東巴は男系で継承され，嫡男とは限らず相応しい男子を選定する。白地では以前は各氏族ごとに東巴がいて，その上に大東巴がいるという祭政一致の結節点に東巴は位置していた。納西族は祭天の民族と呼ばれるほど，天に対する信仰が厚く，その依り代となる樹木崇拝が強い。最も大事な木は柏で，松，黄栗樹などがそれぞれ神格に結び付けられて信仰されている。こうして見ると，納西族は東巴を中心とした氏族共同体であったとも考えられる。現在では祖先の霊は位牌，墓，天にいると考えられているが，前二者は漢族文化の影響であり，もともと，納西族の人々は死ぬと鶴に連れられて一月かけて天国に行くとか，北方にあるズドゥブドゥカ（祖先の国）に行くと信じていた。その道程は『開路経』に示されており，神路図に具体的に描かれている。神路図は幅30cm，長さ20m 程のもので，仏教色の強い，地獄から天国までの階梯がえがかれ，葬式のときに棺を置いた正庁から前庭に向けて掛けられる。東巴は各階梯毎とに内容の異なる経典を読む。かつては二次葬も行われ，その遺跡もあるが，現在は火葬であり，葬送他界観も大きく変化している。

また，「殉情」とは納西族特有の習俗で，普通，結婚相手は親によって決められているが，そうではなく，自分の意によって好きになった人と添い遂げようと玉龍雪山の中にあるという桃源郷，「玉龍山第三国」に行くために心中する事である。そこは緑の絨毯を敷いたような所で，一月働けば一生働かなくてもよく，荷物なども馬や虎が運んでくれるのだという。殉情をうちわけられた友人も後追いしたので，その数はかなりの数になったという。現在でも年に数件はあるといわれる。歌垣はこうした恋愛の契機の一つになっていた。納西族は離婚を認めず，離婚ブーム

の現代中国においても際立った特徴となっている。納西族の婚姻といえば，永寧地方の「阿注婚」が知られている。母系性にもとずく妻問い婚であり，成人に達した娘にはそれぞれの部屋が用意されるので，独特な民家形式となっている。最も現在ではこの地方の人々は自らをモソ族と呼び，納西族ではないと言明している。殉情で死んだ人を家に運ぶときは玄関の下に穴を掘って通す。その時，銅鍋の蓋を被せる。このように殉情死には納西族の婚姻，霊魂観の特質が端的に伺われる。

納西族の民俗文化はそれこそ，チベット文化，照葉樹林文化，中国文化，モンゴル文化などの影響を受けており，信仰・宗教はまさにシンクレテイズム（重層信仰）を示している。極東の島国，日本の多元・多層的な民俗文化のありようを考えるとき，納西族の民俗文化は様々な意味で新しい視点を示してくれる。日本への松茸の主要な供給地でもある麗江はそのためもあって空港を建設中である。納西族と日本の間は遠くて近いと，帰路にようやく全容をみせてくれた玉龍雪山をみて，あらためて痛感したのだった。

二．東巴の系譜—白地の事例の覚書き—

以下，わずかに一日ではあるが白地で行った聞書を覚えとして記しておきたい。

・東巴の継承－男系で継承する。娘しかいない場合は，婿を取り，東巴のことを教える。
　何才ということはなしに，祖父，父のやり方を見て自然に学ぶ。

・加威霊－１２，３才ごろに行なわれ，この儀礼を受けると東巴として認められる。

①正月３，５日－全白地の14の村から朝早く聖地とされる山の中ほどにある洞窟に集まる。
　この儀礼は２，３の村が共同で行う。

②洞窟－鍾乳洞であり，アミショロネコが祭られている。アミショロネコはタワ（柏木）の角柱に神像として描かれている。

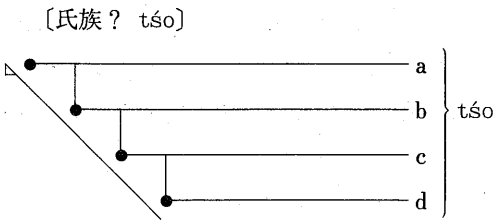
③司祭－ピュラポ（受礼者）は村の力ある東巴に洞窟に連れられていき，まず香を焚く。上の世代の東巴が経を読み，アミショロネコの霊威をたのむ。その間，受礼者は膝づいて，叩頭する。司祭の東巴が霊威を受けて，受礼者につける。
　降りてくる神格は，ムキ？（天空→星→雲→風）→神（翼のある動物→爪のついている動物→角のある動物→蹄のある動物）である。

④コベを食べる－受礼者はコベを受け食べる。コベは稲穂から取った米を炒り，ついて薄い餅にしたものである。これを食べるとお経を読むのがうまくなるという。

⑤衣装－黒い帽子（ツバナ），そこにピューシィといって動物の毛（刺蝟），白鵬鳥，鷹の羽をさす。亜麻の着物を着て，黒い靴を履き，右手に法杖をもつ。

・東巴の序列－氏族組織との関連？
　以前は葬式は tśo で行ったが，現在は村で行う。tśo は人骨を意味し，近縁から遠縁までである。しかし，火葬のときは tśo しか参加しない。ヒグ（２次葬）の時は大東巴を招いて行う。

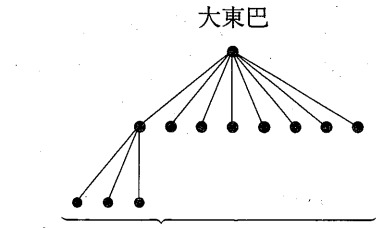
[参 考 図]



近 tśojo(人骨)

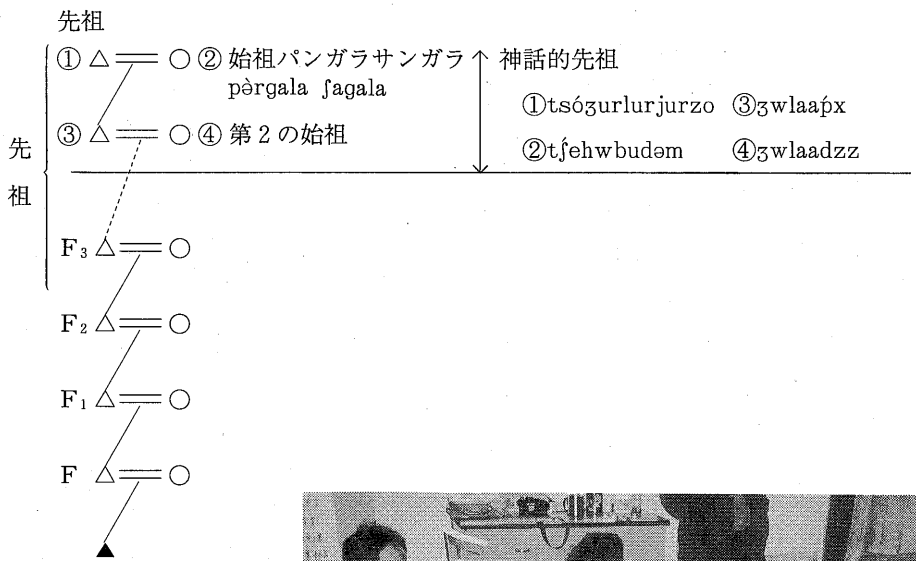
中 tśojo(人骨)

遠 tśojo(人骨)



(古都村)

雲南省迪慶チベット族自治州
中甸具三塊郷古都村



“神牌”について東巴より聞書き
三塊郷文化站にて '93/7/11